



# あごら

第二号

- あごらの会 -

## まえがき

松下 昌義

私たちは、好むと好まざるとに関係なく、歴史的な現実に生きている。その意味で、自分が置かれていた歴史的な現実を正しく認識することは、その時代に人間として生きるための必要な智慧を持つことになる。

私たちが生きている現代という歴史的な現実が如何なる状況なのか、それは、さまざま分野から語ることができよう。

しかし、ここでは、宗教信仰に生きるキリスト者にとっての歴史的現実について少し確認しておきたい。

キリスト者にとって、――また、キリスト教会にとって――歴史的現実が突きつけていることを一口に言えば、「聖書が証しするイエス・キリストへのみ」が神の啓示である」という基本的な命題が、根本から揺らいでいる、ということである。それは、キリスト教のアイデンティティが揺らいでいるということであり、また、キリスト教のアイデンティティが根本から問われているということである。さらに、それは、アイデンティティの再構築が求められているということにほかならない。このことをもう少し詳しく言うなら、古代イスラエルの宗教以来ユダヤ教、そしてヨーロッパを経て継承されて来たキリスト教の伝統的な遺産を、根本から問い返すことによつて、

宗教として抱え込んだ歪みを批判しつつ本来この宗教が提示している命（リアリティ）を現代に明らかにするということである。

このような現代状況に至ったのは、ヨーロッパの近代に於ける科学を含めた諸学の歩みの結果である。その一つに聖書の批判的研究（旧約聖書、新約聖書の歴史学・文献学）がある。それに加えて、世俗化ということがある。世俗化とは、この世（世界と歴史）を超自然的な神を設定することなしにこの世から説明し、理解し、計画するという合理的な認識と行動の仕方のことである。

その結果、神と歴史的現実の関係が失せてしまった。それは、神の唯一の啓示の書であった聖書の言葉と現実とのつながりが崩壊してしまったのである。このような歴史的現実に立って神と人間、啓示（聖書）と人間の関係を、特に二十世紀のころある神学者達は苦悩しながら厳しく深く問いつづけた。このことについて詳細に述べるには私の器量の及ぶところではないし、この紙面では記せない。関心のおありの方は、それぞれの研究書を読まれるとよい。（これに関して私の「まねごと」として記した文章は「『わたしの間続けてきたこと』——今、何が問題か——がある）

それにしても、歴史的な現実として、キリスト者である私たち（キリスト教会）が直面している今一つの重大なことは、宗教多元化とグローバル化ということであろう。

宗教多元化の問題は、簡単に言えば、キリスト教以外の様々な宗教との関係でキリスト教はどのように自らの宗教を位置づけるべきかということであり、グローバル化とは一般的には「資本主義的な市場経済システムの世界的拡大や情報技術の進展による情報レベルでの世界の一体化」

即ち、「主権国家や民族や宗教の特殊性を越えた世界レベルでの全体性・普遍性の成立が合意される」ということである。このようなグローバル化という歴史的状况のなかで、キリスト教は自らの真理性をどのように位置づけるべきかということである。

ここでは、先に述べた、聖書の批判的研究・世俗化の問題と同様、宗教多元化、グローバル化の問題も、立ち入って「つたない私論」を展開する場ではないので控えさせていただが、要するに、この「まえがき」で申し上げたかったことは、歴史的現実という現代状況に直面し、自らの信仰を自覚的に問うキリスト者にとっては、「その内容」や「その切り口」が個人に於いて異なっている、自らが依って立つキリスト教信仰の在り方に、何らかの「疑義」とまどいを覚えていのではないかと思う。

この場合、熱狂的な信仰に立つ信仰者（聖書の文字それ自体が、客観的に神の言葉であり、唯一絶対的な、且つ普遍的な神の啓示の言葉であると信ずる根本主義者—ファンダメンタリスト—）又は、問題意識をお持ちでない方は、その善悪に関係なく問題外である。

先の一号につづいて、この度「あごら誌」第二号に寄稿してくださいました方々の文章を拝見して、その内容はさまざまであっても、それらの論調の底流にあるものは一つであることに気づく。

それは、青年時代に聖書の福音に接し、与かり、社会的にいろいろな場を経験し、今なお、教会の交わりに加わりつつ、そこで、久しく、真摯に、謙虚に、且つ自覚的に求道をつづけてこられる教友方であるということだ。このような方々が、現代の時代状況（歴史的な現実）に直面し、

その現実が問いかける問いを謙虚に聞き、自分の言葉で自分の信仰をお一人お一人が応答告白しておいでだということである。その意味で、この「あごら誌」は、小なりと言えども、傾聴に値すると思う。

今後も、これらの教友方とご一緒に、真摯に謙虚に、祈りつつ求道をつづけたいとねがっている。

二〇〇五年三月三十一日

左京キリスト教会牧師

## イエスを習うとは

松下 昌義

### 一・イエスを習うとは

イエスを習うとは自己を習うことである。自己を習うとは自己の存在の根拠を習い、自己の存在の秘儀に開眼することである。自己の存在の秘儀に開眼した者は、永遠の今を生きる眞実の自己、即ち本来の人間に覚める。

注・「本来の人間」を「創造に於ける人間の自然」とも表言して来た。

自己の存在の根拠は自己自身にはない。自己の存在の根拠は自己の一切の計らいを越えた“創造的な命のたぎりの場”にある。

人が、神を信じようが信じまいが、特定の宗教に帰依してもしなくても、有神論的または無神論的な立場を主張してもしなくても、それら一切の人間自我の計らいに先立って、どの人も、初めから創造的な命のたぎりの場に在り、永遠に在りつづけている。「神を離れて人はなく、天に裏付けられない地上はない」まさに「天は神の御座、地は神の足台である」。人は、死んでも生きても、その命の場から寸時も離れることはない。(マタイ五・三四) このような人間の宗教

的実存に開眼することがイエスを習うということである。

二. "創造的な命のたぎりの場"とは

「創造的な命のたぎりの場」をイエスは「神の支配」と言い、使徒パウロは「神の力」<sup>デコナミス</sup>と言った。

注・「神の力」<sup>デコナミス</sup>の現在性をパウロは「復活のキリスト」に於いて直接経験した。

イエスは言われた。「神の国（神の支配）は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそのようになるのか、その人は知らない。土はひとりで（自然に）実を結ばせるのであり、先ず茎、次に穂、そして穂には豊かな実ができる。実が熟すと、さっそく鎌をいれる。収穫の時が来たからである。（マルコ四・二六以下）

子が親に対して、どのような思いや考えを持っていても、また、子がどれほど自己主張をしても、子の思いとは一切関係なく、子は親から生まれ、親の愛に願われている場の中で育てられる者だ。その意味で、「親の愛に願われている場」とは、恵みとしての「コト」であって「モノ」ではない。

神の支配としての「創造的な命のたぎりの場」は「コト」であつて「モノ」ではない。「モノ」は静的固定的客体的な存在であり、言葉で概念化出来、認識の対象となるものである。しかし、「コト」とは出来事であり、動的な場である。それゆえに、「コト」は客体的な存在として認識の対象とはならない神秘的な命のたぎり、神の創造的な力デユナミスのいぶきである。たとえば、生命とは、命のたぎりに於いて生命であつて、命のたぎりが停止し固定化したとき、「これが生命です」と客体的に示し、言葉で証明することができないのと同じである。だからパウロは、「神の支配は、言葉ではなく力デユナミスである。」と言つた。(コリント四・二〇)

創造的な働きとしての「神の支配」または「力デユナミス」は、同時に「聖霊の働き」「そのコト」です。「あなた方に聖霊が働くときあなたがたは力デユナミスを受ける」(使徒言行録一・八)そして、聖霊の働きの力デユナミスは、「神の恵みに開眼せしめ、「神の深みさえ究める」霊的ソフイデア智慧としての働きである。(コリント二・六以下)更に、「聖霊は思いのままに吹くが、あなたはその音を聞いても、それが、どこから来てどこへ行くかを知らない」(ヨハネ三・八)

注・聖書に於ける「霊」とは、「息」・「風」を意味する言葉。

このように、「神の支配」「神の創造的な命のたぎり」「力としての神の働きデユナミス」人をして神の神秘の深みに開眼させる霊的知恵としての、所謂「コト」とは、一般的にこの世の知恵による認識の枠を越えた、即ち、この世の有無を越えた「絶対の無」であり「絶対の空」だといえる。まったく「掴みどころがないもの」である。更に、厳密に言えば、「絶対の無・絶対の空」という言語の枠を越えた「スツカラカンのカン」そのまんまが、創造的な命のたぎりとしての「コ



ト」である。

イエスは、このような創造的な命のたぎり、創造的な力デユナミス、神の支配としての「コト」、また靈ソフイブの働きを、大地に蒔かれた種の成長の譬えで証示された。"地に蒔かれた種は、人が夜昼、寝起きしているうちに、芽を出し成長するが、どうしてそのようになるのか、その人は知らない。人のはからいには全く関係なく、ひとりでに茎、穂、実へと確実に、創造的に成長して行く。そして、人はその恩恵に与かるだけだ"と。

これは、「神の支配」の神秘的な道理コロゴスである。この創造的な命のたぎりの道理こそ、天地の根拠、人間の存在の創造的な根柢の場である。

この神の秘儀に開眼した使徒パウロは、先にも紹介したとおり、「神の支配は、言葉ではなく力デユナミスである。」と言った。そして、その「コト」を、彼は復活のキリスト（の顕現体験に）於いて直接経験したのである。

### 三、創造的な神の支配と神

創造的な命のたぎりそのコトを、イエスは「神の支配」と言われた。「神の支配」とは創造的な力デユナミスとしての神の命のたぎりの場その「コト」であり、それは、人間の一切のはからいに先立ち、すべての者の足元で"創造的にたぎっている道理としての命"である。だからイエスは言われた。

神の支配は、観察しうるようなさままで到来することはない。人々が「見よ、ここだ」とか、「あそこだ」などと言うこともない。なぜなら、見よ、神の支配はあなたたちの現実の只中にあるのだ」（ルカー一七・二〇以下）

「それ！それ！神の支配は、あなたの却下で創造的にたぎっているではありませんか。よくよく、目を凝らし、耳を澄ましてごらん下さい。見えませんか！ その命のたぎる響きが聞こえますか！」とイエスは言われる。

「創造的な命のたぎり」とは、「必ず完成させずにはおかない力デユナミスとしての命の道理」のこと。このような創造的な命のたぎりの道理ロゴスを示されたのが、先の成長する種の譬えである。さらに、イエスは次のように示された。

神の支配は、からし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔けば、どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。（マタイ一三・三一以下）

人間が思いもつかず、人知によってもはかりがたい大いなる命こそが、人間の存在の根柢であり、根柢なのである。吹けばとぶようなもの、全く無意味、無価値として人が笑い飛ばし、見向きもしないその「コト」が、実は人間存在の根柢、根柢であり、人間を人間たらしめる創造的な命なのである。しかし、人は、この己の存在の秘密に目覚めることなく、自分は自分の配慮によ

つてのみ生きるのだと信じる愚かを犯しつづけ、今に至っても、自我の知恵を振りかざして、省みることがない。人間の（人格の）本来性の回復は自我のはからいによって得ることはない。

すべての人の根柢にあり、人を人として生かし、成熟させる創造的な命のたぎり、即ち「神の支配」<sup>デユナミス</sup>「神の力」を、イエスは、自らの存在に於いて証示された。このことをヨハネ福音書は「言（ロゴス・創造的な大いなる命のたぎりの道理・神の支配）が、肉（目に見える人）となつて、私たちの間（人間世界）に宿られた（住まわれた）」と言った。（ヨハネ一・一四）即ち「ロゴスの受肉」ということである。

神の支配とは、「働きとしての神」の「コト」であり、それはヘブライ的な言表である。旧約聖書出エジプト記三・一三以下で、神の名を求めたモーセに神が、「わたしはある。わたしはあつた」と答えられた物語が記されている。これについて有賀鉄太郎は次のように記している。

「わたしはある」とは、「主体が先ず存在して、それが働く」と考えられているのではなく、むしろ、働くことのうちに主体が自らを啓示するのであつて、主体・即・働き、働き・即・主体なのである。しかし、それはたんに現象的作用のうちに神が内在すると理解されてはならない。むしろ神的働きは現象の過去の性格とは全く異なつた意味での働きである。それは常に「われはハヤーする（われは有り・成る・生起する）」という未完了形を保つところの、将来的・創造的働きである」。ヘブライ語では「成る」とか「生起する」を離れた「有る」は考えられない。

〔キリスト教思想に於ける存在論の問題一八九ページ・有賀鉄太郎著作集4〕

これは、ヘブライ的な神理解についての示唆に富む論述である。

また、木田猷一も「ヤーウエという名は伝統的に『主』と訳されている。それは同じ『ある』というヘブル語の動詞『ハーヤ』の三人称男性単数の使役形未完了で『彼はならせる』『彼はあらしめる』の意味になる。神の声を聞くすべての人が『わたしはある』という自覚を持つ世界を『あらしめる』というのである。」と言う。「古代イスラエルの予言者たち四九ページ以下」

このように、イエスに於いて「神」というとき、また「神の支配」というとき、それは認識論的に対象化された「モノ」としての存在ではなく、創造的な命のたぎり、即ち創造的な働きその「コト」自体である。したがって、イエスは「わたしの父（神）は」刻々に今！今！「創造的にたぎっている」と言われた。（ヨハネ五・一七）それ故に、結論を先取りして言うなら、ヘブライ的な神とは、西欧の伝統的なキリスト教会におけるような人格主義的に認識する対象ではなく、求道者西田幾多郎的な意味での「場所論的」な、創造的な命のたぎりとしての「場」であると言える。このような神の支配の現場からイエスの言動は生起している。だからこそ、先のヨハネ福音書に於ける言葉につづいてイエスは、「ゆえに、わたしも同様に働く（創造的な命のたぎりを生き、成らせるのだ！）」と言われた。

注・創造的な命のたぎりの場その「コト」を、イエスは「お父さん」と言った。

しかし、ここで注意しなくてはならぬことは、神の支配の場から発せられた創造的な命のたぎ

りとしての「コト」は、すでにその「コト」それ自体ではなく、既に「モノ」になっており、人間の認識の対象となつてゐる、この世のもの一つにしかすぎない。なぜなら、この世の「モノ」は、指示言語で対象化出来る「モノ」である。しかし、創造的な命のたぎりとしての「コト」は、「これは（それは）○○である。××ではない」と主語として、指示言語化、情報言語化なし得る限界を突破していることを忘れてはならない。

聖書の言葉を「モノ」として固定化するとき、聖書の言葉は死ぬ。「コト」としての「神の支配・創造的な命のたぎりの場」は、聖霊の働きによる直接経験によつて開眼させられるのである。それ故にパウロは断言した。「聖霊によらなければ、だれも、『イエスは主（キリスト・創造的な命のたぎり）』と言えない」（コリント一・二・三）

#### 四・神の支配、創造的な命のたぎりの場は「愛」

イエスは「コト」としての創造的な命のたぎりの世界、即ち、「神の支配」の何たるかを的確に次のように証示された。再度、先に紹介した譬え話に注目しよう。

イエスは言われた。「神の支配」は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそのようになるのか、その人は知らない。土はひとりで（自然に）実を結ばせるのであり、先ず茎、次に穂、そして種には豊かな実ができる。実が熟すと、早速鎌をいれる。収穫の時がきたからである。（マルコ四・二六以下）

「コト」としての神の支配は、創造的な命の働き、たぎりそのことである。だから、イエスは、そのコトを次のように証示された。「人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して（刻々と）成長し、ひとりでに実を結ばせる」と。

また、「コト」としての神の支配は、人間の一切の計らいを突破し超越している。だからイエスは言われた。「人が、寝起きしているうちに、成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。ひとりでに（自然に）実を結ばせる」と。

過去も、現在も、将来も、生死を越えた一切、そのすべてが、「コト」としての創造的な命のたぎり、神の支配の「場」で生起している。

空の鳥は、種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない、しかし、天の父（創造的な命のたぎり―神の支配―）は鳥を養っている。野の花は、働きもせず、紡ぎもしない。しかし、栄華を極めたソロモン大王でさえ、この花の、一つほどにも着飾っていなかった。

あるがままの命を鳥は空で羽ばたかせ、野の花は大地で無心に咲いている。（マタイ六・二五以下）

人間が己が知恵で価値づけ、意味づけ、認識出来る「真理」という不動の「モノ」があるのではない。そうではなく、「コト」としての創造的な命のたぎり、初めなく、終わりなく、<sup>デユナミス</sup>「力」としてたぎっているだけである。それ事態「スツカラカンのカン」である。だから、イエスは言われた。

今日は生えて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ神はこのように装ってくださる。(マタイ六・三〇)

この「神の支配」の場には、「なぜ」という理由も、「何のため」という目的も、何も無い。人間の意味付け、価値付け一切を突き抜け、そのまんま「コト」として成っているだけである。つまり、神の恵み・恩寵・愛<sup>アガペー</sup>は、神の支配の現場にたぎっているのだから、人の損得の世界の外の「コト」なのである。

人間が価値付けし、意味付けする自我の知恵からすれば、「スツカラカンのカン」の絶対の無<sup>アガペー</sup>としか思えない「神の支配の場・創造的な命のたぎりの場」は、その実、恵みと恩寵、即ち「愛」その「コト」が創造的にたぎっている謂わば天然の場なのである。

だから、イエスは言われた。

お父さん(神)は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨をふらせてくださる。(マタイ五・四五)

悪人、善人 正しい、正しくない、という人知による価値付け、意味付けに関係なく、それらを突き抜けて、等しく太陽は照り、雨は降りそそぎ、そのものを、必ず、本来在るべきものへと成らせ実現させる力<sup>デユナミス</sup>の「コト」としての場が、「創造的な命のたぎり・神の支配の場」なのである。まさに「神は愛である」。

しかし、この表言は「神」が存在して、「愛」を行っている」と理解してはならない。それは、神の支配の場そのコト・創造的な命のたぎりの場そのコトが「愛」である」という意味である。だから、聖書はつぎのように証示している。

神は<sup>アガペー</sup>愛である。愛に住みつづける者は、神に住みつづけ、神もその者に住みつづけられる。

(ヨハネの手紙四・一六)

注・<sup>アガペー</sup>愛とは、人間の分別知が造り出す善悪・価値無価値に関係なく、存在の根柢にあって創造的に働く神の支配としてのコトとしての場を指す。

五. 「コト」を「モノ」として固定化してはならない

イエスは、創造的な命のたぎり、即ち、「神の支配」としての「コト」を証示しているのであって、人間が対象的に認識できる「モノ」としての真理を語っているのではない。

しかし、西欧の伝統的キリスト教会は、「コト」としてのイエスの証示を、それ自体客体的な不動の真理の言葉、神の言葉としてしまった。その文字を「モノ」として固定化し、固定化されたそれを絶対化して、「真理を生きるための生き方の唯一絶対の基準」にしてしまうことにより、「コト」としてのイエスの言動を抹殺してしまっただけではないか、と思う。その典型が「律法（聖書の文字）違反として、当然のごとく行つた、神の名によるイエスの惨殺である。



彼らは、律法（聖書の文字）を自我に抱え込んで「守らねばならない基準」とすることによって、守れない自分の在り方に不安を覚え、聖書の文字に対して脅迫観念をいだいている。このような「律法主義的宗教信仰」こそ、ユダヤ教徒、特に律法学者、パリサイ派の信仰人が迷い込んだ「魔」である。このような魔は、宗教だけでなく、教条主義的な一般世界のどこに於いても起こりうる。現代の原理主義者はその典型である。

イエスは律法主義的信仰に「人間主義」" エゴイズムの発想" "人間自我の意識枠内に抱え込んだ神理解（聖書理解）"を鋭く見抜き、そのような信仰の人を「偽善者」と言われ、その自己主張を厳しく否定された。（マタイ二三・二五以下。）

使徒パウロも、自分が以前に迷い込んでいた見当違いの求道を省みつつ、パリサイ派的律法主義信仰の在り方の誤りを、次のように指摘した

わたしは、彼らが熱心に神に仕えていることは分かりますが、この熱心さは、正しい信仰による認識に基づくものではありません。なぜなら、神の義（然り）を知らず、自分の義（然り）を主張しようとして、神の義（然り）に従わなかったからです。（ローマ一〇・二以下）

「偽善者」とは、うそきつ、二重人格者のことではない。自我の内に神を抱え込み、抱え込んだ神を真理として信仰の対象（「モノ」）とすることで、神を知ったとする在り方のことである。

このような人々にイエスは「あなたがたは聖書の（文字の）中に永遠の命（と言う「モノ」）

があると考えているが、聖書はわたし（と言う「コト」）を証しするものだ。と言われた。（ヨハネ五・三九）この場合の「わたし」とは、歴史的な存在としてのイエスではなく、創造的な命のたぎりその「コト」としての「キリスト」、即ち神の支配・創造的な命のたぎりその「コト」を証示している。

#### 六、自己の生の事<sup>リアリティ</sup>実に開眼すること

聖書の文字それ自体を、客観的に神の言葉とするとき、イエスが徹底的に批判した「律法主義的信仰」となり、信仰人は、ただ文字遵守主義という形骸化された合理主義者、敷かれたレールの上を走る機械仕掛けの人間となるだけである。彼らは、"聖書的、聖書的と皮相に言葉を繰り返し、己の信仰の姿勢を深く問うことなく、自己満足の独善の穴から出ようとはしない。彼らは主客を越えた場から聖書の文字が生じたことを知らない。

聖書の言葉は創造的な命のたぎりの場、神の支配の場から発せられた証示の言語である。たんなる、情報言語ではない。指示言語でもない。命令言語でもない。

聖書に於ける信仰とは、聖書の文字それ自体が絶対不動の真理その「モノ」であると信ずることではない。聖書の言葉は、神の支配、創造的な命のたぎりその「コト」を証示する証示の言語である。その証示を信仰に於いて主体的に受け取るとき、聖書は当人にとって聖書と成る。その意味で、聖書を読むとは、「コト」としての神の支配、創造的な命のたぎりに"自らを開ける

「コト」"または、" 神の支配・創造的な命のたぎりをして、自らを開かしめられる「コト」" だと言える。これが信仰という出来事なのである。

X

" 神の支配、創造的な命のたぎりに、自らを開ける「コト」"とは極めて主体的なことである。また、" 神の支配、創造的な命のたぎりをして、自らを開かしめられる「コト」"とは、主体的な信仰を告白せしめられ、喚起させられることだといえる。つまり、人が聖書の言葉を聞くこととおして、神に応答するそこに、現成してくる主体化された真理に開眼させられる「コト」が信仰だと言える。このような事情をパウロは次のように語った。

X

わたしは、既にそれを得たというわけではなく、すでに成熟した者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。なぜなら、自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。(フィリピ三・一二以下)

つまり、「何とかして捕らえようと努める」主体が、そのまま「キリスト(創造的な命のたぎり・神の支配)の働きに捕らえられているから」だとパウロは言う。神の<sup>デチミクス</sup>力が、「捕らえようとする自我」を包み、その自我に於いて創造的な命のたぎりは証示されることよって、自我自体は成熟して行く。これを滝沢克己的に言えば、そこでの主客は不可分である。が、同時に不可同であり、しかし、そこには神の支配が一である。つまり不可逆なのだ。

このように、創造的な命のたぎり、または神の支配の場に自らを開け、その場に自己を住まわ

せるとき、眼前の状況がどのようであれ、地が自ずから芽を生ぜしめ、茎・葉・花・実へと成熟させられて行く自己の生の事実に開眼する。神の恵みとはその現場にあり、そこで結ぶ実が「愛」である。その意味で、創造的な命のたぎり、神の支配の内容は「愛」が「愛」へと働きかける創造的な場なのだと言える。この命の促しに主体的に応答した一人の人間を、イエスは具体的に語られた。

ひとりの律法学者が現れ、イエスを試みようと言った。「先生、永遠の命を受けるには何をすべきでしょうか」と。彼に言われた。「律法に何とかいてあるか。あなたの読み方はどうか」と。彼は答えた。「心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして主なる神をあなたの神を愛せよ。また、隣人を自分のように愛せよと書いてあります」。イエスは言われた。「あなたの答えは正しい。それを実行しなさい。そうすれば命がえられる」と。彼は自分を弁護しようとしてイエスに言った。

「では、わたしの隣人とはだれのことですか」。イエスは答えて言われた。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、強盗が彼を襲い、その人の服をはぎ取り殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同様に、レビ人もその場所に来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリヤ人は、その人を見て、きのどくに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になるとデナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して行った。「この人を介

抱してください。費用がもつとかかったら、帰りがけに払います」。さて、あなたはこの三人のなかで、だれが、強盗に襲われた人の隣人になったと思うか。律法の専門家は言った。「その人を助けた人です」。そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい」。(ルカ一〇・二五以下)

この、イエスの譬え話は、何を証示しているのか。ただの情報言語、指示言語、命令言語として読み、困っている人を助け、隣人愛を実践せよ！という倫理道德訓と受け取る程度なら、特にイエスに習う必要はない。もし、それだけの教訓なら、人は「そのような隣人愛に生きなければならぬのに、自分にはそれが実践できない」という悩みが増すばかりとなる。もし、実践できたら、その人は自分を誇り、実践出来ない者を蔑む者となるこのような、プチ・ブル的な人間は、まことに鼻持ちならない困り者となり、一見、誠実そうで、その実、極めて自己中心的且つ、利己的人間だと言いえる。その典型が、新約聖書に登場する「律法主義者」達であった。

イエスは小市民的な倫理や道德を説いたのではない。また、一意的な立派な言葉で人を枠にはめ込もうとされたのではない。むしろ、イエスはそのような、一切の枠から人間を解放し、創造的な大いなる命のありのままに生かそうとされたのである。そのような命の場が、すべての人間の却下にたぎっており、だから、人は存在し、鳥は空に飛び、野に花は咲いていると証示された。

七. 創造的な命のたぎり、神の支配の「コト」としての場は「愛」

創造的な命のたぎり、神の支配は「愛」への働きかけの場だと言った。そして、信仰とは、その「コト」としての場（愛）に自らを開ける「コト」、または、その場（愛）をして、自らを開かしめる「コト」だ、と先に述べたことを思い出していただきたい。

倒れている人を見たサマリヤ人は、素直に「きのどく」に思い、自分が出るだけの範囲で彼に接した。ここで大切なことは、「どれだけの事が出来たか。また出来なかったか」ではない。程度の事は人それぞれによって異なる。誰もが、宿屋に連れて行って、介抱し、治療代金を負担することは出来ないだろう。

「サマリヤ人の譬え」で、イエスが証示されたことは、「愛する者は皆、神から生まれ、神を知っている」ということである。（ヨハネ四・七）つまり、先に、創造的な命のたぎり、神の支配の場は、「愛への働きかけ（促し）の場」だと言ったが、まさに、サマリヤ人は、神の支配、創造的な命のたぎりの場からの促しに素直に従い、応答すること、本来的な人間を行じたということである。彼は、神の律法を立て、特定の宗教の教えに自分が囚われたのではない。彼は倒れ苦しんでいる人を見て「きのどく」に思い、自分なりの能力と立場で手を差し伸べた、その行為が、神の支配の場・創造的な命のたぎりの場からの促しに素直に従うこと、その促しに素直に応答する行為となっていたのである。

それに対して、他の二人の宗教人はかえってその教えや律法の文字に囚われた故に、神の支配の促しを無視してしまった。イエスを十字架で惨殺した律法主義的宗教人達の独善と同じである。それゆえに、「行って、あなたも同じようにしなさい」というイエスの言葉を命令言語として「善行をせよ！」と受け取るなら、それは単なる道徳教・律法主義になってしまう。問題は、神

の支配・創造的な命のたぎりに開眼し、その命の自然な促しに自己が開眼している否か、ということである。その結果、生じてくる「善行・愛の実」は、その人、その者の置かれている状況によつて異なり、それは個々人が自分の主体的な判断で決定すればよいのであつて、イエスや聖書や教会や他人に求めるものではない。聖書は人間存在の根拠「コトとしての命」を証示するものであつて、それに応答する責任は人間一人一人の信仰の決断にある。これを忘れてならない。その意味で、聖書を生活の個々に渡るガイドブックとして、その文字面に適合するように自分を構築しようと読むなら、それは少なくとも、イエスが提示した宗教信仰とは関係ない。しかし、律法信仰を説き、その呪縛に囚われている、所謂宗教信者が、世間のさまざまな宗教集団においてのようである。もろもろの独善的な律法主義的生の根がここにある。

「わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にいまし、神の愛がわたしたちの内です」ヨハネ四・一二とヨハネは言った。客体的に「モノ」として在るのではない。さらに、不動の真理として觀念的に概念化された「モノ」ではない。イエスが証示する神は、神の支配の場として、創造的にたぎる命なのである。そして、その命は、人が寝起きし、知らない間に、芽吹かせ、茎、枝、花、実へと成長成熟して行く「コト」としての力デユナミスなのである。

ここで、一つの文章を紹介しておこう

旧約聖書では必ず成就する力を備えたものをエメト、エムーナという。これらの名詞は「アーメン」と語根を等しくする。「アーメン」とは、祈る結びに、祈る者に合わせて会衆が唱和する

へブル語であるが、これは「そのとおりです、そうなりますように」という願いである。神の意思、神の言葉、神の約束はエメトなのだ。必ず成就し実現されるのである。へブル的思考は歴史的存在ではなく、現実というより実現が、基本語なのである。ここにギリシヤ的思考との著しい対比がある。（『フロント構造の哲学』八木誠一 二七〇ページ）

周知のようにへブライ語は存在ではなく生起を語るのに適している。そのように出来ているとさえ言えるであろう。たとえば「ある」に当たる動詞ハヤは、「起ころ」「なる」を意味するのである。「真理」と訳される名詞「エメト」、「エムーナ」は、必ず成就する確かさを有し、その成就を信頼できるもの、という意味を持つ。ギリシヤ語の「真理」が、ロゴスによつて覆いを取り除かれ、明るみに出された存在の実相という意味を有する（ハイデッガー『存在と時間』四四節）と対照的である。（『自我の虚構と宗教』八木誠一 一九七ページ）

イエスは「必ず実現すべきもの」を神の支配として、さまざまな譬えで証示された。大地に蒔かれた種の成長の譬えもその一つである。わたしはその「コト」を創造的な命のたぎりと言つてきたが、さらに、へブル語で「信ずる」とは、神の意志・言葉・約束を「必ず実現すべきもの（エメト）」として自分を開け、受容することであると同時に、それに促されて、その実現に参与することなのだ、上記のとおり研者は述べている。

予定していた紙面がすでに越えているので、最後に大切な事を述べてこの紙面を終わりたい。



## 八、終わりに

結局、聖書における神とは、神の支配の場、創造的な命のたぎり、愛へと必ず成る、または、成らしめる力<sup>デナミクス</sup>。即ち、「コト」としての場<sup>ナ</sup>なのである。

そして、その構造はキリスト教の最も大切な遺産としての「三位一体論」的に表現すれば（八木誠一も同じように言表しているが）、それをわたし流に表言すれば、コトとしての主体（働き）が父なる神―創造者―。コトとしての主体（働き）の内容がキリスト―保持者―。そして、コトとしての主体（働き）の伝達が聖霊―完成者―。イエス・キリストは、まさに「神の支配」―「創造的な命のたぎり」即ち、「愛」として必ず実現する「コト」である命を百パーセント身をもって行ずることで、その「神の支配の場」を証示した方であった。それゆえにイエスはキリスト（神の支配の場、創造的な命のたぎりの場）を行じたという意味で、まさに神の子だと言える。復活のキリスト（創造的な命のたぎり、神の支配）は、今も刻々とたぎりつづけている。だからパウロは次のようにその「コト」を語った。

聖霊も弱いわたしたちを支え助けてくださる。わたしたちはどのように祈るべきかを知りませんが、聖霊みずからが、言葉で表言できないうめきをもって、執り成してくださるからです。神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者たちには、万事が共に働いてその者を（有べきように）成らせてくださることを、わたしたちは知っています。（ロマ八・二六以下）

マタイによる福音書は、次のようなイエスの言葉を記して終わっている。

わたし―創造的な命のたぎりとしてのキリスト―は、世の終わりまで、いつもあなたがたと行動経験を共にして完成する。(マタイ二八・二〇)

今日、この世のどの分野に於いても、イエスが証示した存在の根源である「神の支配」に思いを向ける者は少なく、真摯に求道する者は僅かである。だといって、喜びと希望とに生き、平安に人生を全うする者は殆どいない。老いも若きも本来の人間性を失い、ただ、この世の物にしがみつくしか他なき日々を生きている。使徒パウロは次のように語った。

正しい人はいない。悟る人もなく、神を探し求める人はいない。すべての人は迷い出て、ことごとく無益な者になっている。善行を行う者はいない。ひとりもない。彼らのどは、開いた墓であり、彼らはその舌で人を欺き、彼らのくちびるには、まむしの毒がある。彼らの口は、のろいと苦い言葉とで満ちている。彼らの足は血を流すに速く、彼らの道には、破壊と悲惨とがある。そして、彼らは平和の道を知らない。彼らの目の前には、神に対する畏れがない。(ロマ二・一〇以下)

存在の根源である、創造的な命のたぎり・神の支配に開眼しないままで、人間は自我の生み出す智恵と知識に依り頼み、地球の平和を願って努力している。しかし、イエスが証示した「コト」に開眼しないままで、人知をつくしたとて、破壊と悲惨の道から人類は逃れることは出来ず、最後は自ら招いた天地の崩壊によつて、地球は壊滅するであろう。  
その罪は大きい。

左京キリスト教会牧師

---

「あごら」  
第2号

2005年3月31日発行

発行責任者 平井 浩

〒465-0054 名古屋市名東区高針台1丁目

☎052-701-7678 メールアドレス koh-hirai@mcc.spacetown.ne.jp

発行世話係 小野 恵子

〒520-0862 滋賀県大津市平津1-18-9

☎077-534-3968 メールアドレス k-co@ryukoku.seikyoku.ne.jp

印刷 左京キリスト教会

〒606-0845 京都市左京区下鴨南茶ノ木町29

☎075-781-9640

---